

勇気、信頼、責任、希望

阿 部 包（藤女子大学 QOL 研究所長）

この春、桜前線の北上を待っていたわたしたちは、激しく心を揺さぶられる事態に遭遇した。もちろん、事態というのは東北・関東大震災のことである。わたしたちは来る日も来る日もモニターに映し出される凄まじい映像から目を離すことができなかった。あの美しいリアス式海岸に点在する町々を、巨大津波の猛威は、温かい心根を持った住民の生活もろとも奪い去った。死者・行方不明者の数は既に3万人に迫ろうとしている。

20110311という日付は、わたしたちの胸に深く刻み込まれることになった。かつて、吉村昭は『三陸海岸大津波』で、明治29年、昭和8年、昭和35年の大津波の様相を当時の体験者の証言に基づいて描いた（現在、文春文庫刊）が、これらの経験と決定的に異なるのはわたしたちが原子力発電所を受け入れた後の時代を生きているという点である。

安全性に敏感なわたしたちは、膨大な量の情報を前にして一喜一憂し、疑心暗鬼に陥る。福島第一原発から漏れ出る放射性物質の危険性の度合いは、スリーマイルを超え、チェルノブイリと肩を並べた。この国家規模の災害を契機に、多くの識者が様々な場面での生き方の見直しを提案しているが、少なくともわたしたちは個人のレベルでも国家のレベルでも地球規模でもサステナブルなエネルギー政策を早急に実行に移さなければならないだろう。キーワードは、あらゆる場面での自己中心的姿勢からの解放であり、ある種の受益者負担であろう。受益者負担に「ある種の」という形容を付けたのは、原子力発電所は電力消費量が最も多い場所に設置するのがやはり礼儀だと思うからである。そうなるとう東京電力の原発は東京都内に、北海道電力のそれは札幌市内にそれぞれ設置せざるを得なくなる。本当に安全なら、そうするのが筋というものであろう。「万が一」とか「念のため」などという決まり文句が方便なのは誰もが知っている。

上に掲げた表題は、今春のオープン・キャンパスに、人間生活学科の数名の教員と大学院生が「東日本大震災について」というパネル展示をした際、求められてわたしがカードに書いたメッセージに「責任」を追加したものである。

大震災という未曾有の経験を経て、犠牲になった方々やまだ行方が知れない方々が抱いていたはずの思いを受け継ぎ、被災された方々と心を合わせて地域社会を復興していくために大切なキーワードとわたしが考えているのが「勇気、信頼、責任、希望」である。しかし、これらは、凶らずも、個人、地域社会、国家、世界という違いを越えて、わたしたちが生き方の質を高める上で必須のキーワードでもあるのではないかと今感じている。